

聖徳大学 収蔵名品展

# 藤田 嗣 治

Leonard Foujita

ご あ い さ つ

聖徳学園では、教育理念の一つである本物教育を積極的に進めるため、文学、音楽、美術、工芸等に関する学術資料、文献等を日本国内はもとより世界各地から収集・保存し、それらを展示公開することにより、本物の芸術に触れる機会の充実を図ってきました。

今回は本学で収蔵しているこれら学術資料の中から、日本の近代美術史上特筆すべき存在である藤田嗣治の作品を公開します。

藤田は、自身の著書の中で「私の體（体）は日本で成長し、私の繪（絵）はフランスで成長した」と述べているように、日本で生れ、渡仏後はエコール・ド・パリの一員として高い評価を受けており、晩年はフランスに帰化した画家として、名実ともにわが国が生んだ国際的な芸術家として知られています。

本学では、藤田がフランスで高く評価されるようになった1920年代後半から、円熟期を迎えた1950年代後半までの作品を収蔵しており、藤田が好んで題材とした子どもや女性、猫を描いた作品などを中心に展示します。また、藤田の直筆サイン入り書籍やロサンゼルスで開催された個展の目録など関連資料もあわせて展示します。

フランスで絶賛され、ピカソをも驚嘆させた繊細で優美な藤田作品の数々を心ゆくまでご鑑賞ください。

2019年4月2日

学校法人東京聖徳学園理事長  
聖徳大学長  
聖徳大学短期大学部学長  
学園長 川並弘純

2019年4月2日(火)～8月23日(金)

聖徳大学川並弘昭記念図書館8階 聖徳博物館

開館時間 午前9時～午後5時

休館日 毎日曜・祝日、8月13日(火)～16日(金)  
その他、学事日程により休館となる場合があります。

アクセス JR常磐線、新京成線 松戸駅下車、東口より徒歩5分  
(学内に駐車場はありません。車でのご来場はご遠慮ください。)

【お問い合わせ】

聖徳大学・聖徳大学短期大学部 聖徳博物館  
TEL 047-365-1111(大代表)

松戸駅からのアクセス

公共交通機関をご利用いただき、お車でのご来校はご遠慮ください。



イトーヨーカドー内エスカレーターを利用できます。閉店時は正面の通路階段をご利用ください。

JR常磐線・JR上野東京ライン・JR乗り入れ地下鉄千代田線・新京成線「松戸」駅下車 東口徒歩5分

「私の體(体)は日本で成長し、私の繪(絵)はフランスで成長した。

(中略) 私は、世界に日本人として生きたいと願ふ、」

(藤田嗣治『随筆集 地を泳ぐ』 1942年 書物展望社 より)

## 藤田 嗣 治 (1886-1968)

(ふじた つぐはる、レオナルド・フジタ、Leonard Foujita)

1886(明治 19)年 11 月 27 日東京に生まれる。東京美術学校(現 東京藝術大学美術学部)を卒業後、1913(大正 2)年、フランスに渡り、モディリアニ(イタリア)、シャガール(ロシア)らとともにエコール・ド・パリ\*の代表的画家として活躍した。猫や女性を得意な画題とし、日本画の技法を油彩画に取り入れた繊細な作品を発表した。とりわけ、裸婦に代表される「乳白色の肌」の優美な美しさは、多くの人々の心をとらえ、藤田は一躍パリの寵児ちようじとなった。1933(昭和 8)年に帰国、二科会会員や帝国芸術院会員として日本洋画壇の中心的役割を果たした。1949(昭和 24)年、再びフランスに渡り、その後二度と日本に戻ることはなかった。1955(昭和 30)年、フランス国籍を取得。1958(昭和 33)年、ベルギー王室アカデミー会員に推挙される。翌年カトリックの洗礼を受けて、レオナルド・フジタ(Leonard Foujita)と改名。フランスのランスのノートルダム・ド・ラ・ペ礼拝堂のステンドグラスやフラスコ壁画を手がけた。この完成後の2年目、1968(昭和 43)年 1 月 29 日にスイス・チューリッヒの病院で逝去。享年 81。

### エコール・ド・パリ\*

1918年に終結した第一次世界大戦と1939年に始まった第二次世界大戦の間の平和な時代、とりわけ「狂騒の1920年代」を中心に、世界中から芸術の都・パリに集まった芸術家のうち、特定の芸術理論や流派で括られず、個性的な作品を制作した芸術家たちは、「エコール・ド・パリ」(フランス語で「パリ派」と呼ばれています。

イタリア生まれのモディリアーニ、リトアニア生まれのスーティン、ブルガリア生まれのパスキン、ポーランド生まれのキスリング、ロシア出身のシャガール、そして日本からの藤田嗣治ふじた つぐはるらは、エコール・ド・パリの代表的な画家たちです。彼らはいずれも異邦人としてパリに暮らし、パリという街の魅力と互いの交流に刺激を受けながら、自らの祖国の風土に根ざした独自の資質を開花させました。

彼らのほかにも、世界各国から大勢の芸術家たちがパリに集まりました。エコール・ド・パリが最盛期を迎えた1920年代には、日本からも何百人もの芸術家たちがパリに渡ってモンパルナス周辺に住み、制作に励みました。彼ら日本人の中心的存在が、乳白色の下地と日本画的な繊細な輪郭線による女性像等で華々しい成功を収

### 【藤田嗣治展 主な展示作品】

タイトル、制作年、サイズ(縦×横)、技法・材質の順に記載

- 《雪の中の少女》 1929年 33.5×25.5 cm エッチング・紙
- 《横たわる猫》 1930年 30.5×35.5 cm 水彩・紙
- 《男性の肖像画》 1933年 47.0×39.0 cm 水彩・紙
- 《猫と子猫》 1928年 23.0×32.0 cm 油彩・カンヴァス
- 《少女と猫》 1936年 34.0×26.0 cm 油彩・カンヴァス
- 《優美神》 1946-1948年 127.5×191.0 cm 油彩・カンヴァス
- 《女性と子ども》 1950年 44.0×36.5 cm 油彩・カンヴァス
- 《母親と二人の子》 1950年 32.0×23.0 cm 油彩・カンヴァス
- 《ジャガイモを抱く少女》 1953年 32.0×23.5 cm 油彩・カンヴァス
- 《春の二人の乙女》 1954年 63.5×49.0 cm 油彩・カンヴァス
- 《庭園の子ども達》 1958年 94.0×95.0 cm 油彩・カンヴァス
- 《ペンとミルクを持った二人の子》 1958年 54.0×32.0 cm 油彩・カンヴァス

(展示作品は変更することがあります。)